学習院大学日本語日本文学科所蔵『源氏物語』「藤袴」巻　翻刻

武藤那賀子　富澤萌未　竹田由花子　橋本裕香子

学習院大学日本語日本文学科は、伝二条為氏筆の『源氏物語』「藤袴」巻の写本を所蔵している。

本書は定家本（青表紙本）系統に属するものである。特徴として、定家手沢本の本文を受け継ぐとされる「大島本」とはやや距離があり、肖柏本と三條西家本に近い本文を持つ古写本であることが注目できる。しかし、本書には、巻末に他本で確認出来ない一文を有しているおり、これが問題となる。青表紙・河内・別本共に巻末は「とや」で終わるが、本書は「とそ」として、「なに事もおもひしをれつれはとそきこえたまひける」が続く。

また、本書には「奥入」との対応関係を示すと考えられる古い朱合点が三箇所ある。これを三条西家本・大島本の朱合点と比較すると、以下のようになる（本書と一致する朱合点は囲み枠で示した）。

・三条西家本[注1]

六丁オ九行――道のはてなるとかや

七丁オ二行――いまはたおなし

一〇丁ウ五行――三にしたかふもの

一二丁オ七行――よしのゝたきをせかむよりもかたき事

一七丁オ一行――この大将は（「こ」の方に朱合点の痕跡）

・大島本[注2]

五丁ウ――みちのはてなるとかや

六丁オ――かやうにてきこゆる

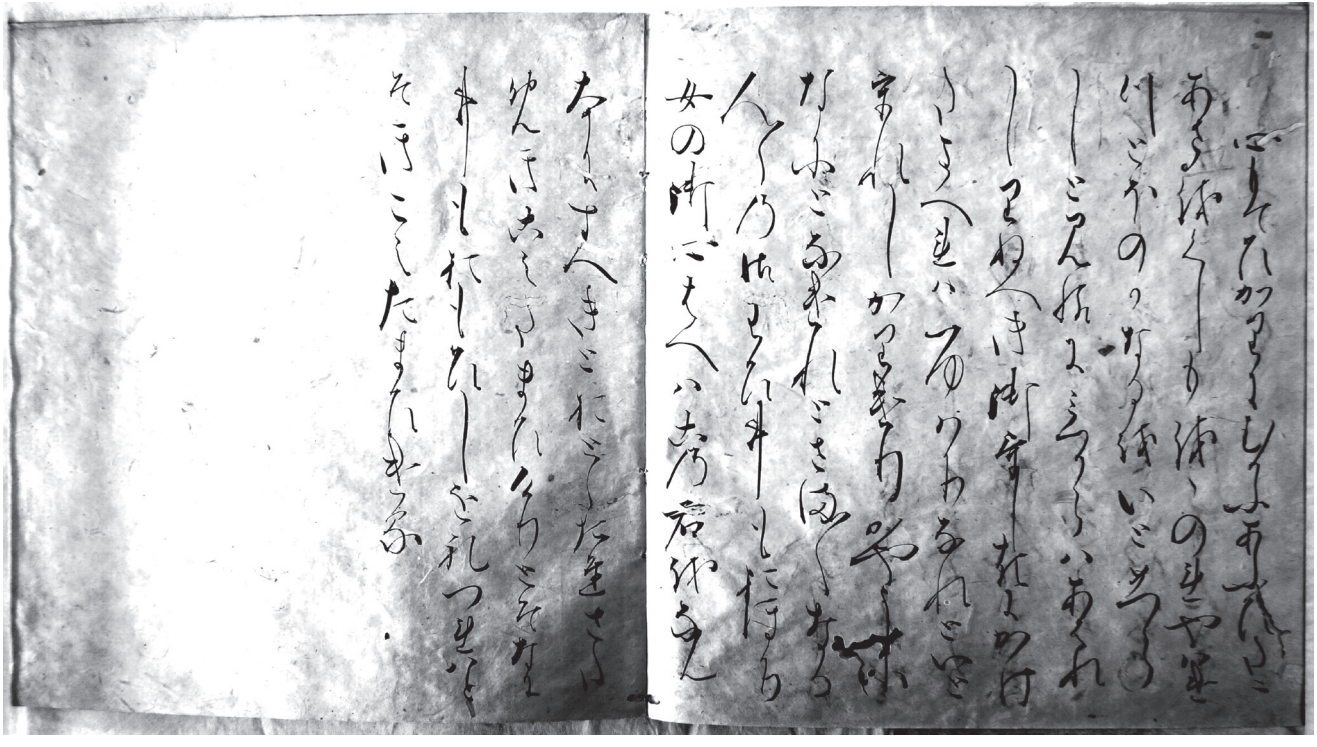
六丁ウ――今はたおなし

九丁ウ――三従にしたかふ

十一丁オ――よしのゝたきを

右に示したように、朱合点の数が、本書と三条西家本や大島本とでは異なっている。

本書は、池田亀鑑『源氏物語大成』にはないが、二〇一四年度に加藤洋介氏がインターネット上で公開した「定家本源氏物語校異集成（稿）」で初めて採り上げられた。しかし、全文翻刻や詳しい書誌事項の報告は行なわれていない。加えて、本文



学習院大学蔵「藤袴」　22丁ウ・23丁オ

の性格と朱合点の数の違いなど、書写の古さだけではない資料価値があることから、この度、解題とともに全文翻刻することにした。翻刻文を掲げるにあたって、本書の性格を理解するためにも書誌事項を確認しておきたい。

【請求番号】九一三・三六／五〇一四

【装訂】六半の綴葉装　一帖

【書写年代】鎌倉時代中期（伝為氏筆／一二二二～一二八六年）

【寸法】縦一五・三糎、横一四・九糎

【外題】後補の金泥引金砂子雲霞文絹題簽（縦一〇・三糎、横二・五糎）に「ふしはかま」と墨書。台紙に貼って修復してある。なお、極札の封に「外題中院通茂公」とあり、その蓋然性は高い。

【表紙】上部より順に、雲に鶴・卍菱繋ぎ・様々な花の唐草文（裏は馬など別文）などの輪郭を手描きして金泥を塗り、余白に藍を差した豪華な絹表紙。一般に用いられる金襴や緞子ではなく珍しい裂を用いている。

【見返し】後補鳥の子地銀泥蜻蛉文型抜・金銀小切箔揉箔散し。

【本文料紙】雲母引鳥の子紙。

【内題】正式な内題はないが、前遊紙表右上に後筆かと思われる小字で「ふしはかま」とある。

【紙数】全二八丁（前遊紙一丁、後遊紙四丁、前後の一枚が表紙の間に入っている）。五枚ずつの綴じが三折。

【字高】約一三・四糎

【半葉行数】一〇行

【一行字数】一二～一六字

【和歌表記】歌は二字下り。一首二行書きで二行目は下がらず、また末尾は地の文に続く。

【書き入れ】六丁ウラ七行目「道の」、七丁ウラ一行目「いまはた」、十一丁ウラ六行目「三従」の部分に朱合点がある。

【保存状態】良。数箇所に虫食いあり。

【箱】二重箱入り。外はかぶせ蓋桐箱で蓋に「藤はかま極札添」と墨書、内はのせ蓋黒漆箱で蓋に金蒔絵で「ふちはかま　為氏卿筆」とあり。猶、外箱蓋裏「一誠堂」印あり。

【極札】「為氏卿藤はかま了音了仲極札／外題中院通茂公筆」と墨書された奉書紙の封に、二枚の極札が納められている。一枚は、「二条家為氏卿　藤はかま　一冊　（「琴山」墨印）」（一四・三×二・一糎）、裏「内侍督の　六半本丁亥三　（「了音」墨印）」とあり、もう一枚は「二条家為氏卿　藤はかま巻一帖　（「守村」墨印）」（一三・三×二・一糎）、裏白とある。現状は二枚共に表裏が剝がれている。筆跡などからも、封の表書通り本家六代了音（一六七四～一七二五）と別家三代了仲（一六五六～一七三六）のものとみて良い。了音のものは宝永四年（一七〇七）三月の鑑定となり、了仲もほ

ぼ同時期であろう。

【その他】 表紙と見返しが剝がれた中に、「十七のならひの八　ふしはかま」と書かれた小紙片（八・一×一・四糎）が挟み込まれている。現在のものより前の表紙の題簽であったもの（猶後述）。

【蔵書印】 前遊紙ウラに「学習院図書館」の朱正方印。二三丁ウラの隅にも「学習院図書館」の朱長方印がある。また、後遊紙四丁オモテの左上隅に、「文私大研設助成／昭35年（１０８８）」の黒印がある。

本帖が伝為氏筆の六半本ということに注目し、僚帖やその古筆切を探すと注目すべき存在を見いだすことができる。それは近年国文学研究資料館の所蔵となった、『源氏物語大成』でも青表紙本の対校本として利用されている榊原本十六帖である（大成では十七帖となっているが、現在は「若紫」帖が離れてしまっている）。

榊原本は鎌倉中期頃の写本（寄合書）に三条西実隆筆の「桐壺」帖を加えて、共通の表紙と題簽を加えたものであるが、その題簽が本帖の表紙と見返しの間に挟まれた紙片と大きさや筆跡が共通している。榊原本の「夕顔」帖の「二のならひの二夕かほ」、「関屋」帖の「十一ならひの二せき屋」とある並びの巻を指摘する書き方は、本帖のそれと同一である。

また本帖の前遊紙表には右肩に小さく「ふちはかま」と書き込まれているが、同様の書き入れが榊原本の「桐壺」帖を除く現存全帖にある。本の大きさや基本の半様行数も共通し、本帖と良く似た書風を「浮舟」帖等に見いだすことができるなど、様々な面において、本帖が本来は榊原本の僚帖であったことは疑いないものと考えられる。ただし、江戸時代の榊原文庫蔵書目録[注3]には既に「十七帖」と見えているので、本帖はその目録に著禄される以前に別れていたものと考えられる。本帖の題簽が中院通茂筆であることからすると、表紙と題簽が制作された時が僚帖から離れた下限になるであろうか。榊原本は全て定家本（青表紙本）であるが、本帖の価値は榊原本と併せて検討することによって一層増すことが期待できる。

以上を鑑み、本帖についてまとめる。

Ⅰ榊原本の僚帖であり、書写されたのは鎌倉時代中期で、書写者は藤原定家の孫にあたる二条為氏と伝えられている。

Ⅱ他の諸本には見られない独自異文が巻末にある。

Ⅲ十七世紀後半に現在の形に改装され、外題を中院通茂が書

いた。また、了音、了仲による極めがある。

Ⅳ明治時代末以降に一誠堂書店が所持し、昭和三十五年に、学習院大学が購入した。

本稿では、独自異文の解釈や、異同本文についての考察はしない。これに関しては、別稿を用意している。[注4] 以下に、全文翻刻を掲げる。

凡例

一．改行箇所や和歌の書式は原本のままとし、利用の便を考え、頁毎に区切り、丁数とその表裏、行数を付記した。

一．原本に用いられている変体仮名は、すべて現行の平仮名に統一した。ただし、原本の平仮名中に片仮名を混用した箇所は、片仮名を平仮名に改めた。

一．清濁、句読点も原本のままにした。

一．ミセケチは、現状では文字に二本線を引いている。このため翻刻では、ミセケチを、取り消し線で示した。また、消した上で文字を補っている場合は、ミセケチにした文字の隣に補った。

一．傍記は、該当する文字の横にそのまま示した。

一．補入記号のない補入は〔　〕で示し、補入記号のある補入は〈　〉で示した。

一．虫食いなどの影響で見え辛くなったために判読し辛い文字は〔　〕で括って示した。

一．問題のある箇所については、注あるいは画像を各丁ごとに載せておく。

一．朱合点は、／で示した。

翻刻

【1オ】

1 内侍督の御宮つかへのことをたれも〳〵
2 そゝのかしたまふもいかならんをや
3 とおもひきこゆる人の御心たにう*1
4 ちとくましきよなりけれはまして
5 さやうのましらひにつけて心より
6 ほかにひんなき事もあらは中宮も
7 女御もかた〳〵につけて心をき給はゝ〔は〕し
8 たなからんに我身はかくはかなきさまに
9 ていつかたにもふかく思とゝめられたて
10 まつれるほともなくあさきおほえに

*1 「う」と書いた上から薄墨で「う」を書き、さらに「う」と傍記している。

【1ウ】

1 てたゝならす思いひいかて人わらへなる
2 さまにみきゝなさんとうけひたま
3 ふ人〳〵もおほくとかくにつけてやす
4 からぬ事のみありぬへきをものお

5 ほししるましきほとにしあらねは
6 さま〳〵におもほしみたれひとしれ
7 すものなけかしさりとてかゝるあり
8 さまもあしき事はなけれとこの
9 をとゝの御心はへのむつかしく心つき
10 なきもいかなるついてにか〈は〉もてはな

【2オ】

1 れて人のをしはかるへかめるすちを
2 心きよくもありはつへきまことのちゝ
3 をとゝもこの殿のおほさむところを
4 はゝかりてうけはりてとりはなちけさ
5 やき給へき事にもあらねは猶とても
6 かくてもみくるしくかけ〳〵しきあり
7 さまにて心をなやまし人〔に〕もてさはか
8 るへき身なめりと中〳〵このをやたつ
9 ねきこえ給てのちはことにはゝかり
10 給けしきもなきをとゝの君の御もて

【2ウ】

1 なしをとりくはへつゝ人しれすなん
2 なけかしかりける思事をまほ
3 ならすともかたはしにてもうち
4 かすめつへき女おやもをはせす
5 いつかたも〳〵いとはつかしけにうる
6 はしき御さまともにはなに事
7 をかはさなんかくなむともきこえ
8 わき給はんよの人にゝぬ身のあり
9 さまをうちなかめつゝゆふくれの
10 そらのあはれけなるけしきを

＊1 「も」がミセケチになっているとも考えられる箇所である。

【3オ】

1 はしちかくてみいたし給へるさまいと
2 をかしうすきにひいろの御そなつか
3 しき程にやつれてれいにかはりた
4 るいろあひにしもかたちはいとはな
5 やかにもてはやされておはするを御
6 まへなる人〳〵はうちゑみてみたてま

7 つるにさい将の中将おなし色のいます
8 こしこまやかなるなをしすかたにて
9 えいまき給へるすかたしもまたいと
10 なまめかしくきよらにてをはしたり

【3ウ】

1 はしめよりものまめやかにこゝろ
2 よせきこえ給へはもてはなれてうと〳〵
3 しきさまにはもてなし給はさりし
4 ならひにいまあらさりけりとてこよ
5 なくかはらんもうたてあれは猶みす
6 にき丁そへたる御たいめんは人つて
7 ならてありけり殿の御せうそこ〻〈と〉て
8 内よりおほせ事あるさまやかて
9 このきみのうけたまはり給へるなり
10 けり御返おほとかなるものからいと

【4オ】

1 めやすくきこえなし給けはひのらう〳〵
2 しくなつかしきにつけてもかの
3 野わきのあしたの御あさかほは心に
4 かゝりて恋しきをうたてあるすち
5 に思しきあきらめてのちには
6 なをもあらぬ心ちそひてこの宮つ
7 かひをおほかたにしもおほしはなた
8 しかしさはかりみところある御
9 あはひともにておかしきさまなる
10 事のわつらはしきはたかならすいて

【4ウ】

1 きなむかしとおもふにたゝならす
2 むねふたかる心ちすれとつれなく
3 すくよかにて人にきかすましと侍
4 つる事をきこえさせんにいかゝ侍へき
5 とけしきたてはちかくさふらふ人も
6 すこししりそきつゝ御木丁のうしろ
7 なとにそはみあへりそらせうそこを
8 つき〳〵しくとりつゝけてこまやかに
9 きこえ給うゑの御けしきのたゝなら
10 ぬすちをさる御心し給へなとや

＊1 「ち」と書いた上から「し」を書き、紙高が足りないために左斜め下に「ろ」を書いている。

【5オ】

1 うのすちなりいらへ給はんこともなく
2 ＊1たゝうちなけきたまへる程しの
3 ひやかにうつくしくいとなつかしきに
4 なをえしのふましく御ふくもこの

5　月にはぬかせ給へきをひついてなむ
6　よろしからさりける十三日にかはらへ
7　いてさせ給へきよしの給はせつ〈る〉[*2]なに
8　かしも御ともにさふらふへく〈よし〉[*3][*4]なん
9　思たまふるときこえ給へはたくひ
10　給はんもこと〳〵しきやうにや侍らん

＊1　「う」と書いた上から薄墨で「う」を書き、さらに「う」と傍記している。
＊2　補入は薄墨で書かれている。
＊3　「く」の上から「き」を書く。
＊4　補入は薄墨で書かれている。

【5ウ】

1　しのひやかにてこそよくはへらめと
2　のたまふこの御ふくなとのくはしき
3　さまを人にあまねくしらせしと
4　おもむけたまへるけしきいとらう
5　あり中将もゝらさしとつゝませ給らん
6　こそ心うけれしのひかたく思たま
7　へらるゝかたみなれはぬきすて侍らん
8　事もいとものうく侍ものをさても
9　あやしくもてはなれぬことのまた
10　こゝろえかたきにこそはへれこの

【6オ】

1　御あらはしころもの色なくはえこ
2　そおもふたまへわくましかりけれ
3　とのたまへはなに事も思わ朴かぬ
4　こゝろにはましてともかくも思たま
5　へたとられはへらねとかゝる色こそ
6　あやしくものあはれなるわさに
7　侍けれとてれいよりもしめりた
8　る御けしきいとらうたけにおかし
9　かゝるついてにとや思よりけ[*1]むら[*2]にの
10　花のいとおもしろきをもたまへ

＊1　〔に〕を書いて削った上から薄墨で「む」と書くか。
＊2　「ん」を書いて削った上から薄墨で「に」と書く。

【6ウ】

1　りけるをみすのつまよりさしいれ
2　てこれも御覧すへきゆへはありけり
3　とてとみにもゆるさても給へれは
4　うつたえに思もよらてとりたま
5　ふ御袖をひきうこかしたり
6　　をなし野のつゆにやつるゝふちはかま
7　あはれはかけよかことはかりも／道の
8　はてなるとかやいと心つきなくうた
9　てなりぬれとみしらぬさまにやをら
10　ひきいりて

【7オ】

1　たつぬるにはるけきのへの露ならは
2　うすむらさきやかことならましかや
3　うにてきこゆるよりふかきゆへはいかゝ
4　との給へはすこしうちわらひてあさき
5　もふかきもおほしわくかたは侍なん
6　とおもふ給ふるまめやかにはいとゝかたし
7　けなきすちを思しりなからえし
8　つめ侍らぬ心の中をいかてかしろし
9　めさるへき中〳〵おほしうとまんかわ
10　ひしさにいみしくこめはへるを

【7ウ】

1　〳〵いまはたおなしと思給へわひてなむ頭
2　中将のけしきは御覧しゝりきや
3　人のうへになと思侍けん身にてこそ
4　いとをこかましくかつはおもふたまへ
5　しられけれ中〳〵かの君は思さまして
6　つゐには御あたりはなるましきたの
7　みに思なくさめたるけしきなとみ
8　侍もいとうらやましくねたきにあ
9　はれとたにおほしをけよなとこま
10　かにきこえしらせ給ことおほかれ

【8オ】

1　とかたはらいたけれはかゝぬなりかん*1
2　の君やう〳〵ひきいりつゝむつかしと
3　おほしたれは心うき御けしきかな
4　あやまちすましき心の程はおのつから
5　御覧しゝらるゝやうも侍らんもの
6　をとてかゝるついてにいますこし
7　もゝらさまほしけれとあやしくな
8　やましくなんとていりはてたまひ
9　ぬれはいといたくうちなけきてたち
10　給ぬ中〳〵にもうちいてゝけるかなと

*1　「ん」と書いて削った上から薄墨で「り」を書く。

【8ウ】

1　くちをしきにつけてもかのいま
2　すこし身にしみておほえし御
3　けはひをかはかり〈の〉ものこしにても
4　ほのかに御こゑをたにいかならん
5　ついてにかきかむとやすからす思
6　つゝ御まへにまいり給へれはいて給
7　て御返なときこえ給この宮つかへを
8　しふ〳〵けにこそ思給へれみや
9　なとのれんし給へる人にていと
10　こゝろふかきあはれをつくし

【9オ】

1 いひなやまし給に心やしみ給
2 らんとおもふ［に］なん心くるしきされ
3 とおほはらのゝ行幸にうゑをみた
4 てまつり給てはいとめてたくおはし
5 けりと思給へりきわかき人はほのか
6 にもみたてまつりてえしも宮つかへ
7 のすちもてはなれしさ思てなむ
8 この事もかくものせしなとの
9 給へはさても人さまはいつかたにつけ
10 てかはたくひてものし給らん中宮

【9ウ】

1 かくならひなきすちにてをはし
2 ましまたこきてんやむことなく
3 おほえことにてものし給へはいみし
4 き御おもひありともたちならひ
5 給事かたくこそ侍らめ宮はいと
6 ねんころにおほしたなるをわさと
7 さるすちの御みやつかへにもあらぬ
8 ものからひきたかへたらんさまに
9 御心おき給らんもさる御なからひ
10 にてはいと〳〵をしくなんきゝた

【10オ】

1 まふるとをとな〳〵しく申給かた
2 しや我心ひ［と］つなる人のうへにも
3 あらぬを大将さへわれをこそうら
4 むなれすへてかゝる事の心くる
5 しさをみすくさてあやなき人
6 のうらみをふかへりてはかる〳〵しき
7 わさなりけりかのはゝ君のあはれに
8 いひをきし事のわすれさりし
9 かは心ほそきやまさとになんとき
10 きしをかのおとゝはたき〈きい〉れ[*1]給へくも

＊1 「きれ」と書き、この二文字の間に上から薄墨で「ゝ」を足し、右側に「き（幾）」らしき字を書いて削ってある。さらに、後から足された「ゝ」に補入記号を濃い墨で入れ、その左側に「きい」とあるが、「き」はミセケチだとも見える。

【10ウ】

1 あらすとうれへしにいとをしく
2 てかくわたしはしめたるなりこゝ
3 にかくものめかすとてかのをとゝ
4 も人めかい給なめりとつき〳〵しく
5 のたまひなす人からは宮の御人
6 にていとよかるへしいまめかしく
7 いとなまめきたるさましてさす
8 かにかしこくあやまちすましく
9 なとしてあはひはめやすからんさ
10 てまた宮つかへにもいとよくたら

【11オ】

1 ひたらんかしかたちよくらう〳〵
2 しきもの［ゝ］おほやけことなとにも
3 おほめかしからすはか〳〵しくてうゑ
4 のつねにねかはせ*1給御心にはたかふ
5 ましなとのたまふけしきのみま
6 ほしけれはとしころかくてはくゝ
7 みきこえ給ける御心さしをひかさ
8 まにこそ人は申なれかのをとゝ
9 もさやうになむおもむけて大将の
10 あなたさまのたよりにけしきはみ

＊1 「ね」から続く筆の跡が、「せ」の書き始めまである。ただ、これは、二二丁オモテ九行目「おほすらん」に同様の例があることから、ミセケチではないと判断した。

【11ウ】

1 たりけるにもいらへ給けるときこ
2 えたまへはうちわらひてかた〳〵いと
3 にけなき事かな猶宮つかへをも
4 なにことをも御心ゆるしてかく
5 なむとおほされんさまにそしたかふ
6 へき女は〳〵三従にしたかふものにこそ
7 あなれとついてをたかへておのか
8 心にまかせむことはあるましき
9 事なりとの給うち〳〵にもやむ
10 ことなきこれかれとしころを

【12オ】

1 へてものし給へはえそのすちの人か
2 すにはものし給はてすてかてら
3 にかくゆつりつけおほそふの宮つかへ

4 のすちにろうせんとおほしをきつ
5 るいとかしこくかとある事なり
6 となんよろこひ申されけるとたし
7 かに人のかたり申侍しなりといと
8 うるはしきさまにかたりまうし
9 給へはけにさは思給らんかしとおほ
10 すにいとをしくていとまか〳〵しき

【12ウ】

1 すちにもおもひより給けるかな
2 いたりふかき御心ならひならん
3 かしいまおのつからいつかたにつ
4 けてもあらはなる事ありなん思[あ*1]
5 くまなしやとわらひ給御けし
6 きはけさやかなれと猶うたかひは
7 をかるおとゝもさりやかく人のを
8 しはかるあむにをつる事も
9 あらましかはいとくちをしく
10 ねちけたらましかのをとゝにいか

*1 「あ」と書いた上から薄墨で「あ」を書き、さらに「あ」と傍記している。

【13オ】

1 てかく心きよきさまをしら
2 せたてまつらんとおほすにそけ
3 に宮つかへのすちにてけさやか
4 なるましくまきれたるおほえ
5 をかしこくも思より給ける
6 かなとむくつけくおほさる
7 かくて御ふくなとぬき給て
8 月たゝは猶まいり給はん事
9 いみあるへし十月はかりにとおほ
10 しのたまふをうちにも心もと

【13ウ】

1 なくきこしめしきこえ給人〳〵
2 はたれも〳〵いとくちをしくて
3 この御まいりのさきにと心よせ
4 のよすかよすかにせめわひ給へ
5 とよしのゝたきをせかんよりも
6 かたき事なれはいとわりなし
7 とおの〳〵いらふ中将も中〳〵なる
8 事をうちいてゝいかにおほすらん
9 とくるしきまゝにかけりあり
10 きていとねんころにおほかたの

【14オ】

1 御うしろみを思あつかひたるさ
2 まにてついせうしありき給た

3 はやすくかろらかにうちいてゝ[*1]
4 はきこえかゝり給はすめやすく
5 もてしつめたまへりまことの御
6 はらからの君たちはえよりこす
7 宮つかへの程の御うしろみをと
8 おの〳〵心もとなくそ思ける頭の
9 中将心をつくしわひし事
10 はかきたえにたるをうちつけな

*1 「ハ」と書いた上から墨で消し、直前の「ゝ」から続けて薄墨で「ゝハ」と上書きしている。

【14ウ】
1 りける御心かなと人〳〵はをかし
2 かるにとのゝ御つかひにてをはし
3 たり猶もていてすしのひやかに
4 御せうそこなともきこえかはし
5 給ければ月のあかき夜かつらの
6 かけにかくれてものしたま
7 へりみきゝいるへくもあらさり
8 しをなこりなくみなみの
9 みすのまへにすへたてまつる
10 みつからきこえたまはん事

【15オ】
1 はしも猶つゝましけれはさい
2 しやうの君していらへきこえ給
3 なにかしはをえらひてたて
4 まつりたまへるは人つてならぬ
5 御せうそこにこそはへらめかく
6 ものとをくてはいかゝきこえさす
7 へからむみつからこそかすにも侍ら
8 ねとたえぬたとひも侍なるは
9 いかにそやこたいの事なれとたの
10 もしくそ思給けるとてものしと

【15ウ】
1 思給へりけにとしころのつもり
2 はとりそへてきこえまほしけ
3 れとひころあやしくなやま
4 しく侍れはをきあかりなとも
5 えし侍らてなむかくまてとかめ
6 給も中〳〵うと〳〵しき心地なん
7 しはへりけるといとまめたち
8 てきこえいたし給へりなやま
9 くおほさるらん御き丁の
10 もとをはゆるさせ給ましくや

【16オ】

1 よし〳〵けにきこえさするも心ち
2 なかりけりとてをとゝの御せう
3 そこともしのひやかにきこえ
4 給ようゐなと人にはをとり給
5 はすいとめやすしまいり給はん
6 ほとのあないくはしきさまもえき
7 かぬをうち〳〵にのたまはんなむ
8 よからんなに事も人めには
9 はかりてえまいりこすきこえ
10 ぬ事をなむ中〳〵いふせく

＊1 「も」と書いた上から薄墨で「も」を書き、さらに「も」と傍記している。

【16ウ】

1 おほしたるなとかたりきこえ
2 給ついてにいてやおこかましき
3 事もえそきこえさせぬやいつ
4 かたにつけてもあはれをは御覧
5 しすくすへくやはありけるといよ
6 〳〵うらめしさもそひはへるかな
7 まつはこよひなとの御もてなし
8 よきたおもてたつかたにめし
9 いれてきんたちこそめさまし
10 くもおほしめさめしもつかへ

【17オ】

1 なとやうの人〳〵とたにうちかた
2 らはゝやまたかゝるやうはあらし
3 かしさま〳〵にめつらしきよな
4 りかしとうちかたむきつゝうら
5 みつゝけたるもおかしけれはかく
6 なむときこゆけに人きゝを
7 うちつけなるやうにやとはゝかり
8 侍ほとにとしころのむもれいた
9 さをもあきらめはへらぬはいと
10 中〳〵なる事おほくなんとたゝ

【17ウ】

1 すくよかにきこえなし給にまは
2 ゆくてよろつをしこめたり
3 いもせ山ふかき道をはたつねすて
4 をたえのはしにふみまとひける
5 よとうらむる〈も〉人やりならす
6 まとひける道をはしらていもせ山
7 たと〳〵しくそたれもふみみし
8 いつかたのゆへとなむえおほし
9 わかさめりしなに事もわり
10 なきまておほかたのよをはゝ

【18オ】

1 からせ給めれはえきこえさせ給は
2 ぬになんおのつからかくのみも侍ら
3 しときこゆるもさる事なれは
4 よしなかゐしはへらんもすさ
5 ましき程なりやう〳〵らうつも
6 りてこそはかくこんをもとてた
7 ち給月くまなくさしあかりて
8 そらのけしきもえむなるに
9 いとあてやかにきよけなる〈か〉たち
10 して御なをしのすかたこの

【18ウ】

1 ましくはなやかにていとをかし
2 宰相中将のけはひありさまには
3 えならひ給はねとこれもをかし
4 かめるはいかてかゝる御中ら
5 ひなりけむとわかき人〳〵はれ
6 いのさるましき事をもとり
7 たてゝめてあへり大将はこの中将
8 おなし右のすけなれはつねに
9 よひとりつゝねんころにかたら
10 ひおとゝにも申させ給けり

【19オ】

1 人からもいとよくおほやけの
2 御うしろみとなるへかめるした
3 かたなるをなとかはあらむとおほ
4 しなからかのをとゝのかくし
5 給へる事をいかゝはきこえかへす*1へ
6 からむさるやうある事にこそ
7 と心えたまへるすちさへあれは
8 まかせきこへ給へりこの大将は
9 東宮の女御の御はらからにそ
10 おはしけるをとゝたちをゝ

*1 「すへ」の字が見づらいためか、上から薄墨で「すへ」となぞり書きされている。

【19ウ】

1 きたてまつりてさしつきの*1
2 御おほえいとやむことなき君
3 なりとし卅二三の程にものし
4 給きたのかたはむらさきのうゑ
5 の御あねそかし式部卿宮の御
6 おゝいきみよとしのほとみつよつか
7 このかみはことなるかたはにもあ
8 らぬを人からやいかおはしけん
9 をんなとつけて心にもいれす

10 いかてそむきなんと思へりその

＊1 〔て〕と書いた上から「た」と書いたとみられる。

【20オ】

1 すちにより六条のおとゝは大将の
2 御事はにけなくいとをしからん
3 とおほしたるなめりいろめか
4 しくうちみたれたるところ
5 なきさまなからいみしくそ心を
6 つくしありき給けるかのおとゝ
7 ももてはなれてもおほしたら
8 さなり女は宮つかへをものうけ
9 におほいたなりとうち〳〵のけし
10 きもさるくはしきたよりしあれ

【20ウ】

1 はもりきゝてたゝ大殿の御をも
2 むけのことなるにこそはあなれ
3 まことのをやの御こゝろにたに
4 たかはすはとこの弁のをもとに
5 もせため給九月にもなりぬは
6 つしもむすほゝれえむなる
7 あしたにれいのとり〳〵なる
8 御うしろみとものひきそは〈み〉[＊1]つゝ
9 もてまいる御文ともをみ
10 給事もなくてよみきこゆる

＊1 「み」と書いた上から薄墨で「み」を書いている。

【21オ】

1 はかりをきゝ給大将とのゝには猶（なを）[＊1]
2 たのみこしもすきゆくそらの
3 けしきこそ心つくしに
4 かすならはいとひもせましなか月に
5 いのちをかくる程そはかなき月たゝ
6 はとあるさためをいとよくきゝ給
7 なめり兵部卿宮はいふかひなき
8 はきこえんかたなきを
9 あさひさすひかりをみてもたまさゝの
10 はわけのしもをけたすもあら

＊1 「なを」は薄墨で書かれている。

【21ウ】

1 なむおほしたにしらはなく
2 さむかたもありぬへくなむとて
3 いとかしけたるしたをれの
4 霜もをとさすもてまいれる
5 御つかひさへそうちあひたる
6 や式部卿の宮の左兵衛督はとのゝ

7　うゑの御はらからそかしした
8　しくまいりなとし給きみな
9　れはおのつからいとよくものゝ
10　あないもきゝていみしくそ思

【22オ】
1　わひけるいとおほくうらみつゝけ
2　て
3　　わすれなむと思ものゝかなしきを
4　いかさまにしていかさまにせんかみ
5　の色すみつきしめたるにほ
6　ひもさま〳〵なるを人〳〵もみな
7　おほしたえぬへかめるこそさ
8　う〳〵しけれなといふ宮の[*1]
9　御返をそいかゝおほすらんたゝ
10　いさゝかにて

*1　「ほ」から続く筆の跡が、「ら」の書き始めまである。一一丁オモテの四行目「ねかはせ」と同じ用例だと考えた。

【22ウ】
1　　心もてひかりにむかふあふひたに
2　あさをくしもをゝのれやはけ
3　つとほのかなるをいとめつら
4　しとみ給にみつからはあはれ
5　しりぬへき御けしきにかけ
6　たまへれはつゆはかりなれといと
7　うれしかりけりかやうに
8　なにとなけれとさま〳〵なる
9　人〳〵の御わひ事もおほかり
10　女の御心はへはこの君をなん

【23オ】
1　本にすへきとおとゝたちさた
2　めきこえたまひけりとそなに
3　事もおもひしをれつれはと
4　そきこえたまひける

注

1　岸上慎二ほか編『日本大学蔵源氏物語　第五巻』八木書店、一九九五年
2　古代學協會・古代學研究所編、角田文衞・室伏信助監修『大島本源氏物語　第五巻』角川書店、一九九六年
3　『書誌書目シリーズ96高田藩榊原家書目史料集成　全4

巻』ゆまに書房、二〇一一年

4　担当者と配分は以下の通り。

一丁オモテ～四丁ウラ　竹田由花子
五丁オモテ～八丁ウラ　橋本裕香子
九丁オモテ～一五丁ウラ　富澤萌未
一六丁オモテ～二三丁オモテ　武藤那賀子
書誌その他　武藤那賀子

補記

この調査は、二〇一三年度の「日本文学史特殊研究――日本古典書誌学入門――」（於：学習院大学、講師：佐々木孝浩教授）を受けて行なったものである。

貴重な資料の撮影及び掲載をご許可くださった学習院大学文学部日本語日本文学科に御礼申し上げます。

準備段階でご教示いただいた佐々木孝浩先生に深く御礼申し上げます。